ジャナキ・クリシュナン
―インドとロシアの友好運動に捧げた人生

藤目ゆき

インドのチェンナイ在住のジャナキ・クリシュナンさんは2016年11月29日、85歳の誕生日を迎えた。ジャナキさんはチェンナイのロシア科学文化センター（RCSC）の創設者の一人であり、1970年からインド・ロシア女性協会（IRWA）の代表を務めてきた。彼女は人生をインド・ロシアの友好と文化交流に捧げた尊敬すべき女性として知られている。2003年にはモスクワ・プーシキン協会の「ベスト・ティーチャー賞」を受賞した。さらに2014年6月には、ロシア語教育のみならずインドとソビエト／ロシア両国に貢献した業績が高く評価され、ヴォルドグラード市から表彰を受けた。RCSCが催した2016年3月の国際女性デーの集いでは、女性が自らの人生、職業、目標を選択する権利を称揚するイベントが行われ、ジャナキさんはインドにおける女性の権利の保護への貢献によって特別賞を受賞した。

左からパンディオンさん、筆者、ジャナキさん、マンジューラさん、シュリニヴァサンさん。パンディオンさんの家で2012年6月撮影。

私は「冷戦時代の国際女性運動」の研究に必要な調査のために2012年6月、2013年9月、2015年2月にチェンナイを訪ねた。その3回の訪問の度に、ジャナキさんに全面的にお世話になった。80代に達する高齢ながら、自由闊達な精神の持ち主で、海外もふくめ

て各地に出かけて活発に運動を続けているジャナキさんにはいつも励まされる思いがした。そのジャナキさんが2017年2月にいよいよインド・ロシア女性協会の代表を勇退するという。隠居を決めたというよりも、インド・ロシア女性協会の新たな発展を期して若い世代を育てたいという考えのようで、長年にわたって築いたネットワークを駆使して今もレイジング・ファンドや集いの組織化にリーダーシップを発揮している。

モニカ・フェルトンを知るキイ・パーソン

インドを訪ねた筆者の主な関心事は、1950年代前半に国際民主女性連盟（WIDF）や国際平和評議会（WPC）などのリーダーとして国際舞台で活動していたモニカ・フェルトンがどうして1956年以後というものインドに移り住み、その後の約14年間にインドでどのような活動をしていたのか、ということにあった。ジャナキさんはおつれあいのP.K.クリシュナン氏（1922年3月21日～2001年9月6日）と共にモニカがチェンナイで望む仕事ができるように支え、1970年に彼女が他界するまで家族ぐるみで親しくつきあった人物であり、インド時代のモニカを知るための最善のキイ・パーソンであった。

2012年の春、『マドラス・ミュージング』にジャナキさんが寄せたモニカ・フェルトンを懐かしむ記事を見つけてコンタクトを試みた私に、ジャナキさんがすぐに返信を下さったときの感激は忘れられない。私はそれまでインドへ行ったことがなく、どのような旅支度が必要なのかも見当がつかなかった。ビザを取るだけで右往左往したり気温が40度くらいだと聞いてびっくりしているような実情だったのだが、当時大阪大学人間科学研究科の大学院生でインド事情に詳しい渡辺真由子さんと大森恵実さんに助けていただいた。また大森さんのつてでチェンナイ在住のシュリニヴァサンさんとマンジューラさんがアシスタントを引き受けてくださった。ジャナキさんはRCSCに私を案内してご自身の活動経験とモニカの思い出を語り聞かせ、さらに自宅で催されたISCUFの会合にも招き、また、生前のモニカをよく知るインド共産党タミール・ナドゥ州委員長（当時）のD.パンディアン氏の家へも案内してくださった。

> モニカ・フェルトンは「フォーリナー（外国人）」ではあったけれども「ストレンジャー（ガイジン）」ではありませんでした。彼女には人間性への愛があふれていて、マザー・テレサとかナイチンゲールに並ぶような人でした。私たちを元気づけてくれました。自分の人生を社会への奉仕に捧げた人です。私たちは彼女を賞賛します。
>
> モニカ・フェルトンには会議や集会で会いました。会合で彼女が話しをするときは、決して聞きそこねないようにしましたよ。彼女の姿を見れば元気が出たのです。モニカ・フェルトンに一度会えば、忘れられません。彼女は私たちの記憶に刻み込まれました。彼女は皆と親しくなりました。当時は多くの同志がモニカ・フェルトンを知っていましたよ。最高指導者たちは皆、彼女を賞賛していました。
>
> （パンディアン氏、2012年6月21日談）

その後の 2014 年、2015 年の訪問の際にも、私はジャナキさんの紹介で様々な人に会い、また色々な場所を訪れることができた。その間にモニカ・フェルトンが可愛がっていたというクリシュナン家の三兄弟、エッジさん・スリラムさん・ラビさんにお会いし、思い出話を聞かせて頂いたのも嬉しいことだった。2014 年 9 月の調査では当時バンガロール留学中でタミル語が話せる渡辺真由子さんにずいぶんお世話になったのだが、二人でエッジさんの家を訪ね、エッジさんの手料理とモニカ・フェルトンが好きだったというインディアン・ラム酒でもてなしていただいたことが懐かしい。2015 年 2 月の旅ではジャナキさんの家に宿泊し、お話を聴かせていただいたばかりか、チェンナイ市内の各地とチェンナイから 70 キロほど南にあるマハバリープラムのドライブに連れて行っていただいた。ここは石窟寺院や石彫寺院、といったインド中世建築発祥の地のひとつで、1985 年に世界文化遺産に登録されている。今では観光スポットだが、1960 年代には人気もなく静かな場所で、モニカもクリシュナン一家といっしょにピクニックを楽しんだそうだ。

モニカ・フェルトンと家族ぐるみの友人になったクリシュナン一家。前列左から PK の母パッタマル、PK、ジャナキ。後列左からラビ、エッジ、スリラム。モニカはよくエドワード・エリオット・ロードにあったクリシュナン家にやって来て、いっしょに食事をしたり、いっしょに出かけたりしていた。モニカと PK は政治談義に花を咲かせ、お互い譲らず言い争うこともあった。ジャナキやパッタマルとはくつろいでガールズ・トークも楽しんだ。パッタマルは英会話はできなかったが、片言や身振りで気持ちは伝わり、お互いに会うのが好きだった。子どもたちはモニカに西欧風の食事マナーやディケンズのようなイギリス文学を教えてもらったことも覚えている。

このようなジャナキさんのご協力によって、私は所期の目標以上にゆたかな調査結果を得ることができた。その成果の一端は、「モニカ・フェルトンの初期原水爆禁止運動への貢献」と題して『アジア現代女性史』第 9 号（2014 年度）に報告している。ジャナキさんにお教えいただいた、モニカ・フェルトンとつながりがあったドーラ・スカーレットのことや、モニカが 1960 年に取り組んだ女子教育事業家シスター・スバラクシュミの伝記の執筆などに関しても、遠からず調査成果を発表したいと考えている。

世界平和運動の一部だったインド・ソビエト友好運動

ジャナキさんとの交流が深まるにつれ、モニカ・フェルトン研究という当面の調査の目的を超えて、私はこの魅力的なインド人女性のライフ・ストーリーにしだいに心を惹かれていった。ジャナキさんの家にいた時、これまでの自分の歩みを本にまとめるつもりだとおっしゃったので心待ちにしていたところ、その半年後、『私のファミリー・ツリーの種・根・花(Seed, Roots and Flowers of My Family Tree)』ができあがった。子どもや孫たちに家族の歴史を残したいということで、表題の通りジャナキさんと PK の家族の歩みがたくさんの写真とともに記録されている。そこにはお会いした時にお話を聞きながらも十分理解できなかったことや、全く初めて知る話がたくさん出てくる。この本を参照しながら、ここに彼女の人生の軌跡をたどってみよう。

ジャナキさんは 1930 年 11 月 29 日、チェンナイより 300 数十キロ南のティルチで生まれた。父親は英領印度軍会計部に勤め、上海で働いたこともあり、開明的な人だったという。娘に教育を与えることに積極的で、ジャナキさんは早くから英語の本を与えられ、マドラスの英国系の名門中学グッドシェパード・コベントリに通った。13 歳のとき、数々の名誉ある賞を受賞した著名な医師だった叔父 T.S.タリマルティが、ジャナキさんにマドラス医大 3 年生であった PK クリシュナン氏との縁談を持ってきた。PK は、タリマルティ教授のお気に入りの優秀な学生だった。ジャナキさんは勉強をやめたくないと言い張って、勉強を続けることを条件として PK と 1944 年 10 月 29 日、13 歳 11 か月の時に結婚した。当時の法律では 14 才未満の少女の結婚を認めていなかったので、父親は軍会計部の職を失うわけにゆかないと、周囲に彼女の年齢を誤魔化したという。

ジャナキさんは希望通り勉強を続け、PK とともにマドラス学生会 MSO（Madras student organization）やインド・ソビエト友の会 FSU（Friends of Soviet Union）の運動にも参加した。1941 年 6 月のナチス・ドイツによるソビエト侵攻の直後、ソビエトを支持するインドの知識人たちが設立した組織である。ノーベル文学賞詩人タゴールの支持を得て、多数の著名な学者、作家、政治家、芸術家、弁護士たちが参加し、講演や写真展、映画上映会、出版物などを通してインドとソビエトの友好を発展させる取り組みを行っていた。資料 I は、1941 年 7 月の FSU の声明文である。ジャナキさんの生涯の仕事となったインド・ロシアの友好運動はそこから始まっている。

第二次世界大戦が終わりインドが独立を達成した後、FSU の活動はしばらく弱まっていたが、1950 年代の初め、FSU を継承してインド・ソビエト文化協会（ISCUS）が結成された。これがソ連崩壊後の 1993 年にインド文化協力友好協会（ISCUF）と改称して、今日に至っている。 PK はマドラス医大卒業後、数か月医学研究所の研究員として勤務した

後、マドラス総合病院で勤めるようになり、クリシュナン夫妻には1948年に長男エッジ、50年にスリラム、そして52年にラビが生まれていた。PKはISCUSの副会長になり、ISCUSの医療部門の責任者をつとめた。ジャナキさんもまたISCUSの活動に参加した。3人の子どもを育てながら、PKの患者たちがいる看護施設の食事の世話もしていたというから、親業と家業と活動の一人三役をこなしていたということだ。

ISCUSの中心は文化事業であったが、全インド平和委員会（AIPC）と連携し、世界平和評議会（WPC）がリードする世界平和運動の一翼を担っていた。WPC副会長だったモニカ・フェルトンがAIPCの集会の機会にインドへ来て、マドラスに住むラジャゴパラチャリにインタビューをしたいと希望した時、AIPCからクリシュナン夫妻にモニカの受け入れを依頼したのは、そんな平和運動のネットワークがあったからだった。1950年代にはインド中国友好協会も活動しており、クリシュナン夫妻はそれにも参加していた。マドラス州が周恩来たちの訪問団を招待した際には盛大な歓迎の集いを催したという。が、1962年の中国・インド紛争以降、両国の友好運動は難しくなった。インド中国友好協会もISCUS・AIPC同様、インド共産党の党員が指導的な役割を果たしていたが、中国との関係悪化・中ソ対立を背景にしてインド共産党自体が三分裂する。クリシュナン夫妻はそんな状況の中でソ連派の潮流になるインド共産党とISCUSに身を置き、ソビエト・ロシア友好運動を続けていった。

ジャナキさんの自宅で催されたISCUFの集い。2012年6月撮影。

ライフワークになったインド・ソビエト／ロシア友好運動

1960年代にはソビエトから多数の訪問者たちを迎えた。訪問者たちとの交流が深まるにつれて、ジャナキさんは本格的にロシア語を勉強したいと思うようになり、全インド・ロシア語協会（AIIRL）で勉強を始める。PKはそんなジャナキさんを喜んで応援した。彼は自分も1966年にソビエト医療訪問団に参加するなどインド・ソビエト友好運動への熱意は変わらなかったが、医師としての仕事も忙しかった。彼は貧しい人々からお金をとらない、診療が丁寧で診断が正確な名医として評判が高かった。ソビエト、イギリス、ドイツなどの大使館の顧問もつとめていたという。ジャナキさんは60年代末までにロシア語

教師の資格を得て、自分が教えるようになった。AIIRL の会長カルパーナ・ジョシがジャナキさんにとって「ロール・モデル」だったのだという。カルパーナは若くしてインド独立のために武装闘争に身を投じ、有名な 1930 年のチッタゴン兵器庫事件の被告の 1 人として投獄された運動家で、インド独立後に共産党に入り、その指導者だったジョシと結婚した。AIILP で学び始めたジャナキさんをカルパーナは暖かく励ましてくれたという。

1975 年に国際女性年の取り組みとして WIDF 会長のフレダ・ブラウン（写真 中央）をインドに迎える。Janaki Krishnan, Seeds, Roots, and Flowers of My Family Tree, p.133 より。

国際女性年の 1975 年、ジャナキさんはインド女性代表団の一員として初めてソビエトを訪問した。長男エッジの結婚式に間に合うように帰国できるはずだったのに、インディラ・ガンジーによる非常事態宣言で国境が閉ざされてしまい、とうとう式に出席できなかった。インドでは家同士のアレンジド・マリッジが普通であり、結婚式は一族の重要この上ないビッグ・イベントである。ところが慣習にも伝統にもまるで囚われないクリシュナン一家にとっては、世間ではとんでもなく由々しい事態と思われそうな「母親不在の長男の結婚式」も、面白かった家族のエピソードのひとつになっているようだ。

PK もジャナキさんも虚飾や因襲を好まず、息子たちが自由に自分の人生を生きることを望んだ。ジャナキさんが息子たちやその妻たちを愛し、誇りにしていることがお会いする折々に感じられたが、彼女にとって「息子の妻たち」が誇らしいのは、彼女たちがどんな家柄の出身だったかではなく、それぞれにしっかりと自分自身の職業を持っているということだ。それはジャナキさん自身が少女の頃から心に決め、希求してきた女性の生き方でもある。親業・家業・活動と三役をこなしながら勉強をし、ロシア語教師になったジャナキさんだが、40 代の終わりになってから、もっと思う存分勉学に集中したいと大学院へ通い始めた。1977 年～79 年にかけてマナサガンゴトリ大学に通い、とうとう歴史学の修士号を取得している。ジャナキさんは 1983 年～84 年にかけて 10 か月間モスクワへのロシア語留学も果たした。その後も何度もソ連・ロシアを訪ねている。チェンナイの RCSC はソ連／ロシアとの交流活動の拠点となり、語学学習や映画上映、舞踊の上演、女性の会や文学クラブ、チェス・クラブ、と、充実した取り組みが盛んに行われてきた。ソ連が崩壊した後も、そして PK が 2001 年に他界した後も、ジャナキさんはライフワークとしてこの RCSC の事業と ISFUC を守ってきた。

このようにしてジャナキさんは自分自身の世界を広げるとともに、若い女性たちが狭い世界に閉じこもらずに広い世界に飛び出していけるように応援してきた。自分の家のドア

を開けて街へ出よう。自分の街だけでなく他の街へも出かけよう。自分の国だけでなく外国のことも知ってみよう。そうして自分の目を開き、世界を広げ、広い考え方ができるようになろうではないか、と。そんなジャナキさんの姿に励まされた女性たちがインドの内外に大勢いることだろう。

私自身も、そのようなジャナキさんにお会いできて本当に幸運であったと思う。国際交流運動の重鎮として敬われているジャナキさんの、講演や発言に際しての堂々たる毅然とした姿勢や、若い世代の人々に語りかける優しくあたたかい態度はとても印象的だった。これからもお元気で活躍を続けてゆかれるようにお祈りしている。

このエッセイの最後に、資料を 3 点紹介しよう。資料 I は、前述の FSU が創立されたときの声明であり、ジャナキさんの長きにわたる国際交流運動の出発点になった歴史的文書である。

資料Ⅱは、2012 年第 20 回 ISCUF 全国会議（於・コルカタ、2012 年 12 月 9〜11 日）におけるジャナキさんのスピーチである。ここにはジャナキさんのゆるぎない歴史意識と彼女が何に価値をおいてソビエト／ロシアとの友好に生涯を捧げてきたかがよく表れている。

資料Ⅲは、その翌年 2013 年にロシア大統領府付属国民経済業経学アカデミーのヴォルゴグラード支部で開催された第 2 回国際フォーラム「国境なき対話」に招待されたジャナキさんが、インド・ロシア女性協会（IRWA）代表として行ったスピーチである。このフォーラムにはイタリア、ベルギー、ドイツ、フランス、ウクライナ、ベラルーシ、ヨルダン、カザフスタンなどからも代表団が参加し、女性と子どもたちに関する様々なテーマが討議された。ジャナキさんは、この時に、その優れた活動に対してヴォルゴグラード市長イリーナ・ソロウィオワから表彰を受けた。

資料Ⅰ　ソビエト連邦友の会（FSU)の宣言　1941年7月

ソビエトを支持する知識人たち

ナチのソビエト連邦に対する攻撃は、世界史の新しく重大な局面を開いた。今日、この戦争マシーン、戦争屋たちが前代未聞の大規模な戦線で猛威を振るっている。

この試練の時、ソビエトがその名誉とする巨大な道徳的・物質的成果に注目することが緊要だと私たちは感じている。私たちの中にはソビエト政権の諸側面に批判的な者もいるし、ソビエトが実践に適用しようとしているマルクス主義を支持していない者もいる。しかし帝政ロシアの暗い遺産と、それに続く悲惨な内戦と、生まれたばかりのソビエトに対する地球上のほとんどすべての強国による介入を思い起せば、ソビエトが実現したものは、ただ壮大にのみ描かれうるものである。

ラビンドラナート・タゴールはそれを熱のこもった言葉で証言し、そして今日の2人の指導的な科学的調査者—シドニー・ウェッブとベアトリス・ウェッブ—は、ソビエト社会主義共和国連邦に関する情報である『ソビエト共産主義—新しい文明』を出版した。

完全な平等

ソビエト連邦では、すべての工場、鉱山、鉄道、そして船積み場や貿易組織も、全体としての人民の財産である。この国の経済的・社会的な生活は、少数の人々の利益ではなく、万人の福祉のために計画されている。ソビエトの計画遂行のドラマは、社会主義的仮説をもたない人々さえをも掴んで離さない。人種や性別や国籍にかかわらず全市民が完全に平等であることが、彼らがこのコミュニティーのビジネスに参加することを可能にしている。

教育の機会均等が普遍的に提供され、学校を離れる年は17歳に上げられ、大学では学生に給付金が与えられる。すべての人に仕事が提供され、失業がない。他の場所ではどこでも頻発している経済危機はなくなっている。1日の最大労働時間は8時間で、平均すれば7時間以下である。すべての人に無償の医療が提供され、労働者は病気で仕事を休んでも働いているときと同じように賃金が払われ、それ以外に毎年有給休暇の権利を与えられている。公平な観察者の証言によっても、世界のどこにもソビエト連邦ほど女性と子どもたちが手厚く保護されているところはない。

構想の壮大さ、実践の細やかさ、その形式の科学性、ソビエトが試みようとしている任務は、過去においても現在においても、いまだいかなる国によっても試みられていない。

科学的精神

「我々が創造するに、抽象理論やテクノロジーの領域においてと同様に、公費の支出によって、これほど大きく、これほど様々な科学的研究が行われている国はない。イギリスやアメリカの科学者たちが現在不満を述べているような利益をあげようという衝動のために科学が阻害されるようなことは確かにほとんどまったくない。」

ソビエト共産主義

私たちインド人は、革命後、ソビエトが帝政ロシア政府が他の列強と共にアジア諸国で享受していたすべての「資産」と「協定」と「租界」と「特権」を放棄したというその偉

大な態度を忘れることはできない。

数多くの民族と何百万もの人民がツァーリに計画された後進性を非難されていたが、ソビエトによる民族的・言語的マイノリティの解放は高い文化を花開かせ、かつて迷信と暗黒の教会的反動が君臨していた地に、新しい知的生活が生み出された。ソビエト社会主義共和国連邦には185の民族と147の言語があるが、人種的・言語的な特権は存在しない。

女性の解放

女性の解放のための法律を採用した初めてのイスラム国家はケマル・パシャのトルコではなく、ソビエトのアゼルバイジャンである。ソビエトのウズベキスタンは、エミール（藩王）と彼のハーレムや宮廷のために8,000人の祈祷師がいるが医者は一人しかいないブハラ・ハン国と、どれほど大きく異なることか。

ウェッブ夫妻は次のように指摘している。「ソビエト連邦は平等によって『法律を持たない劣った民族』を脅しているにすぎないのだろうか？ しかし、ソビエト連邦は彼らの後進性が何世紀にもわたる貧困、抑圧、奴隷化の所産であることを認識しつつ、教育や社会投資、工業投資や農地改革において、そうした民族的後進性をその政策の主要な焦点として、共通の財源から優越的な民族よりも一人当たり相当な額を支出している」。

知識への愛

ソビエト社会主義共和国連邦における書籍の出版部数は、桁外れに多い。第一次五カ年計画の終了時、ソビエトの書籍出版はイングランド、ドイツ、日本を合わせた数よりも多かった。

ナチスに追放されたアインシュタインは、おそらく他のどこよりもソビエト社会主義共和国連邦で販売されている。彼の著作は1927年から1936年の間にソビエト連邦で5万5,000部販売された。

シェークスピアの生誕375年記念日は、彼の生まれた地では顧みられることがないままだったが、ソビエト連邦の至るところで労働者と農民によって祝福され、1939年の春にはモスクワで約20万人の人々がリア王を観劇した。小さな共和国であるアルメニアでは、シェークスピアの作品が過去5年間に3万2,000部販売された。

ソビエト人民は我々の言葉で「教養ある諸階級」を持っており、何も望んでいない。彼らは全面的に教養ある人民を求めており、すべての人々に余暇、安全、機会を与えようとしている。

新しい文明

ソビエトの普通の人々が、20年余りのうちに途方もない条件の中で、私たちが新しい文明と考えるものを創造した。そして、錯乱と堕落の世代に制圧されている私たちインド人でさえ、この文明が危機に陥っているときに平静のままではいられない。私たちが無力で不自由であっても、少なくともソビエトに私たちの好意を伝え、ソビエトに向けられた軍勢に対してソビエトが勝利を収める日を待望することができるのである。

資料Ⅱ　第20回ISCUF全国会議（於・コルカタ、2012年12月9〜11日）

第20回ISCUF全国会議が西ベンガル州のコルカタで開かれるのはただの偶然ではありません。

インドに2人の偉大な人物、すなわちラビンドラナート・タゴールとジョティ・バス同志を与えたのはこの州だということを、大いなる喜びと共に思い起そうではありませんか。この2人は共に、インドの進歩と自由のための闘いに援助を与えました。

ラビンドラナート・タゴールは、第1回ノーベル文学章受賞者であり、私たちの国歌の作詞者であり、インドの自由のために熱心に活動した堅固な信念をもった人物であり、人権侵害に反対して声をあげた人物であり、女性の解放のための偉大な戦士であり、カースト制度の根絶のために闘った傑出した人物であり、作家で詩人、偉大な教育者であり、そして最後になりますが、偉大な愛国者でした。

2009年にチェンナイで開催された前回のISCUF全国会議では、2010年5月から2012年5月まで全インドでタゴールの生誕記念日を祝うことが決定されました。

タゴールは作家・詩人であっただけでなく、正義を支持し、あらゆる不正義や抑圧に対して声をあげた人物でした。ISCUFに属している私たちは皆、インドのすべての州でタゴールの生誕記念をふさわしいやり方で最大限に祝福しようとしていることを喜び、誇りに思います。

ジョティ・バス同志に関して言えば、この友好運動に参加している私たち皆にとって改めて紹介するまでもないでしょう。彼は後にISCUS／ISCUFになるFSUの一部でした。ジョティ・バス同志はその全生涯を通して友好運動を支持してきました。彼は今年で98歳になります。1941年から2010年までジョティ同志は友好運動の強さの支柱でした。

私たちの母国インドに対するラビンドラナート・タゴール偉大な仕事や、ヒレン・マケルジー、スネハングシュ・カンタ・アチャリア、ブペンドラナート・ドゥッタ、ブペシュ・グプタ、ジョティ・バスその他のFSUの偉大な人物たちのことを思い起しつつ、私たちはこれら偉大な人々に敬意をもって頭を垂れ、自由、進歩、友好、世界平和に向けた彼らの努力に心から感謝するものです。

コルカタでの第20回ISCUF全国会議に集まった私たちは皆、ここに代表団、参加者、学生、芸術家等々が参加していることを喜び、誇りに思っています。

私たちは皆、それぞれが他の諸国との友好と文化交流という目標を助けるために私たちの生活を捧げることをこの会議で誓おうではありませんか。

今日、ISCUFは全ての諸国との友好・交流、文化協力を強めるために自らを捧げます。

インドの青年たち！ これは皆さんへの呼びかけです！ すべての諸国との友好を強化するというこの偉大な目標を助けるために前進し、最大限の努力をしようではありませんか！

ISCUF、万歳！
世界平和、万歳！
友好、万歳！

心が怖れをいだかず、毅然と高くたもたれているところ、
知識が自由であるところ、
世界が狭い国家の壁でばらばらにひき裂かれていないところ、
言葉が真理の深みから湧き出づるところ、
たゆみない努力が完成に向って両腕をさしのべるところ、
理性の清い流れが形骸化した因習の干からびた砂漠の砂に吸い込こまれ道を失うことのないところ、
心がますますひろがりゆく思想と行動へと、おんみの手で導かれ前進するところ—
そのような自由の天国へと、父よ、わが祖国を目覚めさせたまえ。

［ラビンドラナート・タゴールの詩集『ギーターンジャリ』から］

資料Ⅲ　講演：「平和と安全を支持する女性組織のネットワークの国際的な経験」
第2回国際女性フォーラム「国境なき対話」、於ヴォルゴグラード、2013年

私たち世界の女性は、新たな世界戦争を止めるという困難な問題に直面している。どうすればそれができるだろうか？ それは可能だろうか？ これは簡単な任務ではない。

私たちはこの女性フォーラム「国境なき対話」が主催する会議に参加するために、そしてスターリングラードの戦いの70周年を祝うために、ヴォルゴグラードに集まっている。今日きわめて重要なものになっているこのテーマについての考えをまとめようではないか。「世界の女性たち―暴力から解放された世界のために」、そして私たち世界の女性が果たすべき役割を付け加えさせてほしい。

ヴォルゴグラードはツァーリツィンあるいはスターリングラードとしても知られている。現在私たちは皆、言うまでもなく、地元の人々が経験せざるをえなかった困難な日々について多くを読んでいる。それらを読むと、私たちの心は悲しみで燃え上がる。勝利の日まで勇気をもってこれらすべての日々を生き抜いた女性たちについて読むとき、私たちの心は誇りでいっぱいになる。スターリングラードは1925年4月10日にヨシフ・スターリンにちなんで名付けられた。ヴォルゴグラードで行われた戦争は、第二次世界大戦の重要な部分だと言われている。よくあることだが、最も被害を受けるのは一般大衆であり、普通の市民、女性、子どもたちである。この大戦は、言うまでもなく、民族主義的傾向とその特定の時期の緊張によって引き起こされた。ジューコフ司令官が率いるこの軍隊では、2000万人が亡くなったが、ドイツの退却に貢献した。南部では1943年1月にドイツが降伏し、北部では1943年2月に退却が行われた。この特別の打撃を受けて、ヒトラーは「戦争の神は敵の側に行ってしまった」と発言したと言われている。

アウシュヴィッツやブーヘンバルトの拷問収容所／死の収容所の日々を学ぶことでは第二次世界大戦の恐怖や平和維持の必要性を私たちに教えるのに十分でないとしたら、何がそして誰が世界平和の必要性を私たちに教えることができるだろうか？ 今日でさえ、ナチの収容所を思い出させるものとして、家族から引き離され、家族を見つける希望さえ打ち砕かれた、腕に番号の入れ墨をされた人々が多くいるのである。

ふたつの世界戦争では十分でないとすれば、なぜアメリカは真珠湾爆撃に復讐するために広島と長崎に原子爆弾を投下せねばならなかったのだろうか？ それらが私たちに平和の重要性を教えなかったとすれば、他に何がそれを教えることができるだろうか？

まず何よりも、私たちの子どもたちに、たとえまだ低学年であっても、戦争の恐ろしさ、軍拡競争の危険、他国の侵略への貪欲さの中で世界の様々な諸国で何百万人もの人々が虐殺されたことを教えよう。私たちはふたつの世界戦争、大量虐殺を引き起こした様々な戦争から、世界平和の真の必要性が生じていることを学ぶことができないだろうか？

私たちはベトナムやカンボジアの独房で泣き叫ぶが全く救われなかった人々の死の叫びを忘れることができるだろうか？ この歴史が私たちに教訓を与えるのに十分でないとすれば、私たちはそれを他の何に求めればよいのか？

戦争の真っ只中で、家族は引き裂かれ、再び見つけることができず、自分たち自身の国に立ち寄ることもできず、他の国に隠れ場を求めることになる。

ここに世界平和を強化するという私たちの任務があり、それに至る道筋がある。私たち

はそれぞれ、様々な組織、とりわけ女性組織を通して、もうひとつの世界戦争を阻止するというこの困難な任務を果たすべき重要な部分となっている。

女性には、常に複数の仕事を同時に行う用意をし、毅然としていなくてはならない、という教訓がある。女性が人生の軌道に責任があることを忘れてはならない。不幸にも、インドでは女性の堕胎や女性の嬰児殺しが驚くべき割合で増大している。政府はこの不幸な状況を止めるために法律を制定し最善を尽くしているが、十分に成功していない。

同様に、女性の権利に関する法律も、生活の場や職場で求められる平等を女性に与えている。女性に対する慈善ではなく、平等な尊厳の権利の表現としての一律給付年金の要求もある。インド大統領だったA・P・J・アブドゥール・カラム博士の「女性が尊敬されるとき、私たちの国も尊敬される」という言葉を思い起そう。今年3月中旬の国連会議でインド・イスラム諸国・西洋諸国が、諸国を貫いて宗教的、文化的、社会的な規範の違いを問わず、潜在的に広範囲にわたる女性に対する暴力と闘う枠組みの導入のために協力した。

ここに、世界平和に向けて活動する私たちの任務も始まる。私たちの子どもたちは、それぞれの国の未来の市民であるばかりでなく、世界の市民ともなることを思い起そう。世界平和への愛と世界が様々な戦争の中で通過しきたことに関する知識を子どもたちに説明することはきわめて重要である。

学校で子どもたちに平和の重要性を教えることから始め、家庭、学校その他の教育機関、職場、すべての都市、そしてもちろんそれぞれの国中で平和の重要性を教えるべきだ。

すべての市民は平和の重要性、戦争の恐怖、私たちがこれまで学んだ教訓を学ばねばならない。私たちは皆、「世界平和を守ろう」「もう戦争はいらない」「子どもを平和の中で成長させよう」「皆、世界平和のために活動しよう」というひとつの旗の下に団結しよう。

インドで、私たちは同じ考えをもつすべての組織をひとつの目的をもったプラットフォームにまとめるために共に活動している。私たちインド・ロシア女性協会（IRWA）、インド文化協力友好協会（ISCUF）、全インド平和連帯組織（AIPSO）はロシア科学文化センターと協力して、この目標の実現のために活動している。これらは全て首都ニューデリーに全国本部があり、各州に本部と地区本部がある。各地区や各州にいる事務所員がインドの他の地域のカウンターパートとの活動を継続的に点検する。それらはロシアとその他の多くの国と友好の結びつきがある。私たちが政策、文化、友好について学ぶのに役立つ活動のニュースと交流の流れは途切れることがない。それは私たちがそれぞれの国について大いに学ぶ教訓の流れが途切れることがないのと同様である。訪問団の相互派遣は私たちが出会い、考えを交換するものとして常に歓迎される。前述の私たちのすべての組織がそれを呼びかけ、訪問団を交換する準備を整えている。訪問団は、学生の訪問も奨励されるし、ダンス・グループや女性組織の活動家や専門家の訪問団も歓迎される。

私たちは様々なチャンネルを通して活動し、互いの言葉を学び、私たちの文化、芸術、音楽、スポーツについての知識を交流し、訪問団を相互に送ろう。そして、この友好を通して私たちが他の国々と声を合わせて、「もう戦争はいらない」「友好と平和こそを」と世界に向けて宣言するとき、私たちは誇りをもって「私たちはそれをした！」「私たちはそれを実現した！」と言うことだろう。

ジャナキ・クリシュナン
ーインドとロシアの友好運動に捧げた人生